
8-

神代翁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

8 -

【Nコード】

N4574Z

【作者名】

神代翁

【あらすじ】

20年前、怪と呼称される化物が現れた。

最初は、特段危機を感じる程の能力を持たなかった彼らは、時と共に、あるいは外的刺激と共に変化反応 進化し、やがて戦場は泥沼化を始めた。

相手が学習する所為で強力な兵装を使えば使うほど、己の首を絞める結果となる。

何処から来るかわからず、どれだけの数がいるかもわからない。

何も得ることのない戦争に疲れた人類は、人間兵器の作成使用に踏み切った

プロローグ

プロローグ

鉄格子の嵌められた窓から、五月の暖かな陽光が差し込んでいる。灰色を基調とした取り調べ室じみた部屋で僕は椅子に座らされ、目の前に座る男と話していた。

「まずは、おめでとうと言わせてもらおう」

カマキリみたいな細顔に銀縁フレームの眼鏡。度が強いせいで目が大きく見えて、そこもまたカマキリっぽい。実物は見た事がないけど。スーツの色がダークグレーじゃなく緑色だったら完璧だったのに。

カマキリ男改め三笠寛人一佐が僕の目を真っ直ぐ見つめながら口を開く。

「最終プログラムに残った17組の被験体の中から君たち 和人で、あつてるかね？ ああ、そうそう。苗字は弘中が支給されるから、以後それを名乗る様に」

頷きを返す僕に三笠一佐は手元の資料を捲りながら言葉を紡いでいく。

「他のプランは君たちのところのように時間通りに完成しなかったようだね。君が編入後、一体が追加される以外は暫くこないようだ。接続骨子の調子はどうかね？ 頷くのではなく」

「大丈夫だと思います」

「ふむ。君の場合は脳とその繋がりが要だからな。まあ、検査結果も良好だ。活躍を期待している。では、君が現状を正しく確認しているかを確認させてくれ」

「了解。 現在、日本国及び世界の国々には幽霊が「日本での名称は怪だ」了解。怪が多数出没しており、怪がどこからくるのか、また突然現れる特徴からどういった移動手段ないしは物質構成力を

持っているか現在調査中。大きくわけて怪には三種あり、脊椎動物を象った骨型、昆虫に類する外形能力を持つ蟲型、主に意志ある無機物として行動する無形型、の三種です。「無形型の所以は？」霧状や霞状になってリーダー機器の破壊、及びこちら側の錯乱に努めるからです。また、非常にレアなケースではありますが富士山脈における金属壁状防壁などの形も確認されており、一重にコレだ、という共通項がないためです」

そこまで話した僕を、腕を振って止め、三笠一佐が付け加えるように言う。

「君の、君たちの行動意義が変更されている事は担当官から報告されているか？」

「はい。本来の製造目的は人類に代わって怪との戦闘を引き受ける事でしたが、目標数が揃わなかった為、目的を修正して、出来る限り人類側の損害を軽微にすること」

「そうだ。そしてこの決定に対して陸軍内部で決定があった。君が戦場に出ている時に、上から階級順に二名が死亡しないしは指揮不能に陥った場合、君の階級は陸曹スタートだが、階級と関係なしに君に指揮権がうつる。つまり、君たちが稼働するのは上位二官が死亡しないしは行動不能に陥った場合だ。了解したか？」

「了解」

「では解散。以後は真田三尉が引き継ぐ」

三笠一佐の敬礼に僕も敬礼を返し、三笠一佐の右後ろに控えていた真田三尉の後に続いて部屋を出る。無機質な廊下をコツカツと足音を立てながら歩いて行く。先は陽光の差し込む方向であるのに、見通せない程の闇を感じるのは何故だろうか？

三笠寛人は弘中和人のカルテをパラパラと捲っていた。総合成績は甲の最高値だが、三笠は彼よりも上がいた事を知っている。そのペアはグリングと呼ばれ、17組中最も期待されていたペアだったが、最後の接続骨子の調整に失敗して脳が焼き切れてしまった為に

繰り上げで弘中和人が最前線に投入される運びとなった。

三笠は思う。

今現在、人間は倫理観の限界地点に来ていると。弘中和人たち実験体は人工子宮で生まれた設計子供だが、人と同じ遺伝子を持ちながら人として見なされないのは何故だろうか？ 生を与えられ、性を与えられ、人の為に、人と似た機械として死んでいく。

三笠は思う。

我々は何処かで、間違つてはならない道を間違つてしまったのではないかと。

だが、怪との戦闘は20年間続いている。全人類の四分の一、耕作可能地の四割が失われた。これから先、世界では慢性的な飢餓が輪をかけて酷くなるだろう。コレ以上人類を減らすわけにもいかず、さらには迅速に耕作地を取り戻す必要がある。だから、間違つていようとも進む必要性がある。そう重い息を腹に沈めながら自分を納得させる。

弘中和人のカルテを捲っていると興味深い説明を見つけた。思わず頬がほころぶ。

『逢いたくて』

彼はそう答えたのか。なるほど。奇知外に知識と能力を与えれば、現在の状況に風穴が空くとしても？ 研究者も行きずまってきているのか。カルテの続きには万が一彼が暴走した際に止める手段が七ペーじに渡って書き込まれていた。

「逢いたくて、か」

基地司令部のどこかで、重々しい排気音が唸りを上げ、やがて遠ざかっていく。

三笠はカルテの中から彼の精神状態に関して書かれたページから何枚かを抜き取り、そしらぬふりをしてカルテを所定の位置に戻しに行った。

能力値的には問題ない。

お前が世界を変えられるか、見ていてやるよ。

プロローグ（後書き）

自分何が出来るんだろう、という事でアクション系を試してみます。
付き合って頂けるなら幸い、叩いてくれるなら僥倖、感想がくるな
ら五体投地して床を舐めますw

所在 一

所在

弘中和人が軍用車両に乗せられて連れてこられたのは、富士の山が見える基地。20年前に始まった戦いの最中、もともとも早く増設された基地である富士宮基地だった。怪は人の多い方向に移動する習性があり、日本の怪が主に発生するのは富士周辺であることから、富士山を囲むようにして基地あるいは塹壕が築かれている。

だが、20年間人類の全勝だった訳ではない。初めて無形の怪が確認された時、全体の八割の無線及び赤外線探知機が動作不能になり、果てには霧に包まれて衛星さえも使えなくなった。現場の兵士に何が起こってるかがわからないままに、気付いたら東京に怪の大部隊がいた。7万人の死亡が確認され40万人は以前行方不明扱いとなっている。第一次東京怪災と呼ばれる怪災である。第一次では東京に居座る人も600万人はいたといわれるが、居座らざるを得なかったのかもしれないが、第二次第三次と起きた怪災によって全員の心が折れるか、死亡するかした。以後怪の一団は名古屋、大阪と狙いを変えていき、20年経った今では富士山から半径200キロメートル圏内にいる人間は軍関係者だけとなっている。

真田三尉は何も話さず前を歩いて行く。富士宮基地の中は誰もいないかのようにシンとしていたが、時折誰かの視線を感じて振り返るとそこには富士宮基地の兵士たちがいて、興味深そうに、あるいは気味悪そうに僕の事を見ている。

やがて、僕に与えられる部屋についたらしく、真田三尉が「入れ」と低い声で言った。声に従って部屋に入ると、四畳程の空間に二段ベッドが一つ、僕の背丈ほどある緑色のロッカーが二つあるだけの窓さえない部屋だった。洋式のトイレがとってつけたように壁際に鎮座している。

「現在時刻は14:37。夕食は18:00からだ。それまでこの

部屋にて待機」

了解、と返すと真田三尉は部屋を出、扉に鍵を掛けて行ってしまった。外からは鍵が掛けられるのに、中からは掛けられないという囚人部屋のような設計。窓がないのも逃走等を警戒しての事かもしれない。

逃げるわけないのに。

そういう風に作られたんだから。嘆息しながら並んでいるロッカーの右側を開ける。迷彩服が上下二着ずつ、それから白いＴシャツが二枚に、トランク스가二枚。無機質な鉄の箱が一つ。

箱は長方形をしていて、全長約15?、全幅20?、厚さは5?、重さは3キロ。箱の側面から何かのコードが伸びている。端子は通常の家庭機器にはあり得ない程太く、赤い色をしていた。床に座り込んだ僕はコードを摘み、首の後ろ側を引っ搔いて皮膚に偽装された蓋を開けると、そこにある筈のジャックに端子を突き刺した。

「いい」

脳を突き刺す様な刺激がビリビリと駆け抜け、やがて網膜に直接映像が映し出される。今見ている景色の上に青い画面があって、その上に初期設定の文字が踊り、滝の様に文字が流れて箱が、箱の中の機械が僕と同調を始めていく。

『初期設定：開始』

『所持者：

』

所持者の欄に意識を合わせて「弘中和人」と漢字を思い浮かべる。すると『所持者：弘中和人』と設定画面が書き変わり、続いて年齢体重血液型特定の持病等と設定が行われていく。

パソコンに後付けでつけるＨＤのようなものだ。僕自身の脳もいじくられていて、その容積の20％は機械が占めているが、それに更に演算能力を足す為の後付けとしてコレを使う。と言う事を僕は聞いて知っていたし、実際に使った事もあった。ただ、実験で使われた物よりもコレは数段パワーが上だった。恐ろしい速さで1と0が書き変わっていくのを感じる。ともすれば僕自身の演算能力が負

けて、時折視界がブロック状に割れて1と0と意味不明の単語が羅列された。

「ただだけ箱 説明でも箱と言われた と繋がっていたかわからないけど、ノックされる音に気付いて僕は首筋から端子を抜いた。強制終了に文句をいう事も無く、待機状態を維持する僕の脳。」

またしても真田三尉が「入れ」と低い声で言い、続いて誰かが部屋に入ってくる。それを僕は冷たいコンクリートの床から立ち上がり、直立不動で眺めていた。

肩で切りそろえられた真っ白の髪と、血の色をした瞳が目に入ってきた。カーキ色の野戦服に身を包んだソレは黒くて細長いケースを大事そうに抱き締めている。

「初めまして。 頭脳特化の弘中和人です」

「初めまして。 肉体強化の赤目です」

コクンと頷き、慌てて敬礼をしたソレに向かって僕も敬礼を返しながら「赤目？」と尋ねた。

「人間味を排除する為に性を与えられていません。 頭脳特化と違って私は戦う為だけに作られましたから」

なるほど、と僕は頷いた。 だけど、僕自身も僕に戦う以外の使命があると始めて知った。

やがて赤目の担当だった男が部屋の扉を閉め、しっかりと鍵を掛けて三度ほど確認してどこかへと歩き去った。

四肢はある、頭もある、だが、異様に細い。 僕が男の兵士しか見た事がないせいだろうか？ 赤目は女性体の兵士であるようだった。戦う為に作られたにしてはあまりに細い足、枯れ木のような腕。 眼光が時々チキチキと音を発てて光る。 階級章は二等兵。

「僕が上官と言う事でいいのかな……。 親睦を深めるのはとりあえずおいといて、まずはベッドの上と下を決めよう」

「私は下を希望します」

「上官権限で却下する。 君は上だ。 それからロッカーは左を使ってくれ。 僕は右を開けてしまった」

あつと言つ間に話題が尽きた。赤目がそろそろと歩いて左のロツカーを開ける、

「あの、」

「ん？」

「男物が入っているのですが……」

これはどうなるのだろうか？ 確かに僕らは人に似た機械として作られた。だけど、女性の体を持つ以上、支給品も女性の物にするべきではないのか？ 「少し待っていてくれ」と赤目に言い、先ほど中断した初期設定を再開する。

初期設定を終えると予想通り、基地内部と繋がるLANが一つだけあった。そこにアクセスし、赤目の支給品について問い合わせると、

『ひと月後の支給までそれで代用されたし』

という返事が返ってきた。ソレにふむふむと頷き、書いてあることを赤目に向けて音読してやる。すると赤目は少しだけ困った顔をしてから、「わかりました」と敬礼をした。この場合敬礼はいらないのではなからうか、そう思い僕は「私用の場合は敬礼はいらないのではないか？」と赤目に訊ね「上官殿にはいつも敬礼だと教わりました」と返され「これから共同で暮らすのに敬礼は面倒であろう」と言い返す。三十分程かかって僕は赤目に、自室内においては敬礼と敬語を使わなくて良い、階級を意識しなくて良いと取り決めた。それに対して赤目が「じゃあ私ベッド下が良いです」と反論してきたので話はややこしくなり、結局夕食の時間までありとあらゆる事について言い争う結果となった。頭脳特化の僕の圧勝、もとい詐欺師の口上が炸裂した。

所在 一（後書き）

読んで下さっている方よ、本当にありがとう。

一つだけ謝らなければならないことがあるのです。

……ごめん、タイトル飾り

！

所在 二

食事は全員が広間に集まってから行われる。時間の十分前にこなければ飯は抜かれる。

席にあまりはなく、僕と赤目が向き合って座る両隣にも他の兵士はいたのだが、極限まで席を僕達から離している為、ほとんど専用テーブルとなってしまうた。僕と赤目は機械的に夕食を食べ、機械的に盆を返し、機械的に挨拶をして自室へと戻った。後ろには真田三尉がついてきていて、僕らが部屋に入ると鍵を閉めた。

部屋に入ると僕は箱を持ってベッドに寝そべり、箱の能力値を理解する為に電子の海に潜りっぱなしになり、赤目は細長いケースからドラグノフを取り出して整備を始めた。細長いケースにはドラグノフの他にM4A1と自動式拳銃が収まっており、それぞれ90発ずつ弾も入っていた。

「ふう」

目を剥くような速さで三丁の分解整備を終えた赤目が冷たいコンクリートの床に寝そべった。ベッドの下が取れなかった事が余程悔しいらしく、半眼で僕を見ている。なるほど。確かに上では銃器の分解整備は天井が近すぎてできない。

そして、彼女が赤目という名を与えられたのは、普通の人間にしか見えない彼女を道具として扱う為なのだろう。そうぼんやり考えた。

「頭脳特化って、」

「ん？」

「何をする為に作られたんですか？ 私は解を求める為に、って聞いたんですけど」

「解？ ああ。指揮官になるべく作られたんだよ。この戦況はどうだ、というのを確認する為に後付けの箱まで使って計算し、戦場を最適解に導いていく。僕らはその為に作られた。無形が現れたさい

にも、有線を使っていれば最低限の計算は出来るしね」

と赤いコードを目の前に掲げて見せる。すると赤目が、

「私は今ある兵器を最大限に活用する為に作られました。進化、御存じですよ？」

もちろんと頷く。

進化とは、怪の成長の事である。環境進化と適応進化の二つがあるのが昨今では知られているが、そのうちの環境進化は出没する地域によって形態を変化させること。例えば日本ではあまり見られないが、ロシアの奥地などになると怪に毛が生えたり、皮下脂肪が厚くなったりするらしい。コレに対して適応進化とは、外敵。つまりところ僕らの攻撃に対して適応していくことを示す。例えば日本やアメリカ等に出没する怪には熱系の攻撃が効きにくい。怪が出てから数年間、日本は町での出現が多かったために火炎放射器を使った事、アメリカは広大で何も無い土地に怪が現れた場合は迷いなくミサイルや焼夷弾を打ち込んだ事に由来する。不燃性の液で体を包んだり、表皮組織を瞬間的に捨てて再生させたり。そういった特性を持ち出している。

だから、僕らは驚異的な威力を誇る武器を持ちながら、それを使う事が出来ない。万が一それに適応された場合、自分達の首を絞める事に繋がってしまうからだ。だが、適応進化は進化を誘導する事が出来る。貫通力に優れた攻撃が来た場合は、単純に貫通力を弱める生物へと変性していく。

つまるところ、銃だけを使っている限り彼らは、皮膚を硬くする、臓器を極端に守る、速度を上げて避ける、等の基礎能力しか進化できないわけだ。各国はこの適応進化を酷く恐れている。

とある共和国において、ドルトンの悪夢と呼ばれる事件が起こった。共和国軍が「怪の体内組成は人間や他の動物とも大きく異なるが、タンパク質の塊であり、酸素も必要とする」としてサルファ・マスタード等の生物兵器による鎮圧を開始した。

最初は良かった。怪たちは為すすべもなく薬に焼かれて死亡し、

ガスは拡散し問題ない濃度まで下がる。繰り返した。繰り返した繰り返した。馬鹿の一つ覚えのように繰り返した。

結論からいおう。土中を移動するタイプの怪が多数発生、共和国軍が気付く事もないままに怪は首都まで土中を移動し、唐突に尾を外気に晒し、彼らがやったことをと同じ事をした。サルファ・マスタード、ホスゲン、種々多様な毒ガスが首都を包み、首脳が逃げる間もないうちに国が滅んだ。近隣二国もその被害を受けたが、その当時は辛うじて残っていた国連軍が総出で動いて土中を移動するタイプの怪を殲滅した。

どこからでも現れて、こちらを追うように攻撃してくる。まるで幽霊^{ゴースト}だ。

誰が言い始めたかは知らない。だけど共通意識として皆が持っている。そんな言葉。

「私は可能な限り銃を使い続ける為に設計されました。目、わかりますか？」

「たまに黒目の部分……赤目の部分かな？ その周囲が動くね」

「機械に眼球の補助をさせているんです。黒目にしていないのはレンズが天然物ではなく人工物だからなんです。人工着色をする必要性がないため、また精度が乱れる場合があるので。血の色がそのまま浮き出ています」

どうりで血の赤なわけだ。なるほど、と頷き、期待に満ちた目で見ている赤目をぼんやりと眺める。そんな目で見られても、僕にはそんなビクリ面白機能は頭蓋骨の中にしかないんだけど……。まさか頭蓋を割って見せろというのだろうか？ いやいやそんなまさか。

「明言しておくけど、僕にはそんな目で見てビクリみたいな物はないからね？」

「首の後ろ、どうなってるんですか？」

見えないから意識から外れていた。僕はベッドの上で態勢を変えてうつ伏せになり、右手で首筋を引っ搔いてジャックを赤目の前に晒した。

「おおー」

赤目の手がうずうずと動くのを見て、「触ってもいいよ」と言う。すると、おずおずとはあるが赤目が僕の接続骨子の辺りを触っているらしい。らしいというのはその辺りの感覚が、麻酔をかけたようにぼんやりとしたモノであるからだ。特に接続骨子のジャックなんて何も感じない。ただ押された圧迫感が喉の奥の方にくるだけだ。やがて満足したのか赤目が僕から離れ、いそいそと二段ベッドの上におとなしく収まった。銃のケースはちゃっかり上に持ち込んでいる。油臭くなるのが気にならないのだろうか？

「なんて呼べばいいんでしょうね？」

「は？」

「弘中さんですかね、和人さんですかね？ それとも隊長！ でしょうか？」

「……好きに呼べばいいと思う」

「ではでは和人さんで。ところで和人さんは、実験所でも和人って呼ばれていたんですか？」

「……グレーテルが僕らペアの名前だったよ。揶揄して帽子屋なんて呼ぶ人もいたけどさ」

「ペア？ ペアの方はいらしてないんですか？ あと、帽子屋？」

「ペアは箱の事だよ。繫げば、繫げればわかるかもしれないけど、何となくもう一人、なんだよ。研究員達も僕らを、僕しかいないのに「お前ら」って複数形で呼ぶ事があるから。それで皆ペアって自分の事を呼ぶようになった。帽子屋は……鏡の国のアリスって童話知ってる？」

「知らないです」

「アリスは鏡の国っていう不思議なところにいつてなんやかんや、って話なんだけど。帽子屋っていうのはそこに出てくるオカシナ人

のこと」

19世紀のイギリス、帽子屋では帽子の防水加工にシンナーを使っていたという話もある。以外に童話と言つのはそういうところからも情報を取り入れているものだった。

「すごいですね。どうして知っているんですか？」

消灯時間を過ぎたらしく、電灯が何の前触れもなく消えた。どうりで電灯のスイッチがないわけだ、と一人納得しながら、

「頭脳特化は何が起きても対応できるようにひたすら知識を詰め込まれるんだよ。関係無いと思われる知識まで、ひたすら。基本的には戦術の勉強……なのかな。とか、国語とか数学やったり、色んな国の言葉を習い続けたり。ひたすら頭を使い続ける感じかな」

「私たちは逆ですね。頭なんて使いません。ひたすらの撃つたり、鉛玉と150mの水を渡されて、フル装備で山を12時間以内に二つ踏破してこい、とか。2キロ先の的に、スコープを使わずに弾丸を当てたり」

「2キロ？ スコープを使わずに？」

「はい。集中すると目の焦点倍率を変更できるんですよ。できたからと言つて、当てるのは簡単じゃないんですけどね」

たはは、と赤目がベッドの上で笑う。でも、赤目はできたからココにいるのだ。人と機械のハイブリッド。それが僕と赤目。戦場を変える為に生まれた兵器。

「そうそう、そう言えば」

「君、眠る気ないだろう？」

所在 二（後書き）

読んで下さる方って本当に偉大ですよ。

だって素人ですよ？ 毒にあたる可能性が高いのをわざわざ読んでくれてるんですよ？

その中でもキャリア一年ちょっとの私という、解毒不可能クラスの物を読んで下さっている方、本当にありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4574z/>

8-

2011年12月16日22時51分発行